

わが村の昔ばなし

桧垣七郎

(会員・佐伯市下久部岡ノ谷)

まだ私達の家庭にテレビは勿論のこと、ラジオもない幼い頃の冬の夜など、炉辺や寢床の中で、父や母に語り聞かされた「ふるさと久部の昔ばなし」を、思い出すまゝ、に書きとめておきたい。

私はこのような話を聞いてその場面を想像し、或いは笑いころび、或いは怯えて布団を頭から引被つて息を殺しながら、いつしか眠りについたものである。

娯楽の少なかつた時代、このような昔ばなしは子供達にとつて何よりの楽しみだったのである。

一、ソウシユクさんの話

(一) 姉さんの尻を撫でる

ソウシユクさんの姉さんはなかなかの度胸者だったらしく、淋しい夜道を灯りも点けずに川を渡つて隣村まで

彼氏のところに夜遊びに通っていた。

それを知つたソウシユクさんは「俺がひとつ姉さんを脅かしてやろう」と思い立ち、姉さんが毎晩渡る川の藪陰で待つていた。

そこに何も知らない姉さんが今夜もやって来て、暗闇の中で尻をまくつて川を渡ろうとしかかった。

この時を待つて、かねて水で手を冷やしていたソウシユクさんが藪陰から冷たい手でツルリと姉さんのお尻を撫でた。

驚ろきたまげるだろうと期待していたソウシユクさんの意に反して、姉さんは少しも騒がず、闇の中で「ソウシユクどうくるな(ふざけるな)」と言い残してそのまま行つてしまった。

(二) 水神火

ソウシユクさんの村の近くに昼でも気味の悪いような淵があり、その畔ほとりに小道があつた。

村人達はその小道を通つて隣村などへ往来していたが、その淵の向う岸に夜な夜な青白い水神火(人魂)が灯るといふ噂が広まり、村人達は恐れて夜の人通りは

バツタリ途絶えてしまった。

ものを恐れぬソウシユクさんの姉さんは「オレがその正体を見きわめてやろう」と夜になるのを待つてその小道を通りかかったところ、噂のとおり向こう岸に青白い水神火が灯っている。

ぬき足さし足その水神火の所に近づいて行つた姉さんが「ソウシユクわれじゃろうと思うた。われでなけりゃこげなことをする奴はおらんわい」と頭上から一喝した。

それは御苦勞なことに、ソウシユクさんが毎晩巨大なアワビの殻と蠟燭を持って行つて渚の岸に座り込み、アワビの殻の内側の青白く輝やく面の前で蠟燭を灯していたのであつた。

(三) 蜘蛛の糸

ある夏の夕暮れ時、ソウシユクさんが淋しい渚の畔で腰を下して休んでいたところ、何処からともなく一匹の大きな蜘蛛が出てきて頻りにソウシユクさんの足に糸を掛ける。

「おかしなことをする蜘蛛じゃのう」と思つていたが、その糸を自分の足からそつと外して足元にあつた大きな

木の切株に巻きつけておいた。

いつの間にか蜘蛛がいなくなつてしばらくすると渚の底から「そうりゃあつ」という無気味な掛け声が聞こえて、蜘蛛の糸のからまった大きな切株は水柱を上げて夕闇迫る渚の中に引きずり込まれた。

二、ヤゴツネの話

(一) 狸の皮

昔、隣村にヤゴツネという頓智のある、やや粗忽な男がいた。

ある日、村人達が狸狩りをしたところ、一匹の狸が村人達に囲まれ追いつめられて逃げ場を失い、近くの棕の木に登つた。

村人達が下から竹槍でその狸を突こうとしたところ、彼が「やんや、やんや、皮を害シマう皮を。(竹槍で突けば皮が破れて傷物になる)」と言つて皆を制し、自分が棕の木に登つて捕まえようとした。

狸は隙を見て「ヤゴツネまた来る。アバヨ」と言つて彼の頭にピツと小便をしかけて逃げてしまった。

彼は恨めしそうに頭を撫でながら逃げる狸を見送って「ちゃあつと!! (しまった)」と言つて嘆息頻りだった。

幼い私は「ヤゴツネ」というユーモラスな名前と「やんやんや、皮を害^{シツ}う皮を」という台詞^{セリフ}が面白くてたまらず、この話を何度聞かされても、その都度笑いこぼして喜んだものである。

(二) 蠟燭の芯を抜く

昔の百姓達は、支配者である殿様や侍に強い反感を持つ者も多かった。

ある闇夜に、殿様がお忍びで近くの川に夜釣りに来ていた。

それを知ったヤゴツネがその近くまで行き、川に石をドボン、ドボンと投げ込んで釣りの邪魔をした。

殿様達がそれに気を取られている隙に、今度は近くに掛けていた提灯の火を吹き消し、おまけに蠟燭の芯を抜いてしまった。

怒ったお伴の侍が「おのれ、何奴か」と言つて彼を探そうとしたが、如何んせん辺りは真の闇でヤゴツネの居場所は皆目わからない。

急いで提灯を点けようとしたが、蠟燭の芯が抜かれていたために灯が点かない。

お伴の侍達は地団太踏んで悔しがったが、さすがに殿様は「蠟燭の芯を抜くとはなかなか智慧のある奴じゃ」と言つて、姿の見えないヤゴツネの機智に感心し褒めてくれた。

なお昔の蠟燭は、紙を巻いて作った大きな芯をハゼの木蠟で巻き固めたもので、場合によっては芯を引き抜くことができたのである。

三、口の大きい爺さんの話

(一) 豆腐のカド

昔、この村に非常に口の大きい爺さんがいた。

ある日、町に出て知り合いの飲食店に寄つたところ、丁度飯台の上に皿に入った豆腐が一丁あった。

腹の減っていた爺さんは、その豆腐を無造作に口に入れた。

店のおかみさんがびっくりして「爺さんその豆腐はもう売っているのに」と言つたところ、爺さんは「ああほ

んとか」と言つてすぐに口から豆腐を出した。

一旦爺さんの口に入った豆腐のカドは少しも欠けていなかったという。

(二) 大蛤

ある日、浜辺で珍しく大きな蛤が獲れた。

丁度そこに居合せた爺さんに村人が「爺さん、なんぼお前の口が大きくてもこの蛤は入るめえ」と言つたところ、負けん気の爺さんは「なあに、わけがあるか」と言つてその大蛤を口に入れてしまった。

さて、それを取り出す段になつて、蛤を口から出そうとするが口一杯で大きいのと、貝に丸みがあつてツルツルしているので、どうしても取り出せない。

見ていた村人達も心配になつて、あれこれアドバイスするが、うまくいかない。

すると村人の中に智者がいて「たぎり湯（煮え湯）をかければ蛤も死ぬので取り出せるだろう」と言つたので衆議一決、爺さんの口の中の蛤にたぎり湯をかけることになった。

ところがたぎり湯を浴びた蛤が死んで爺さんの口の中

で貝殻が上下に大きく口を開いてしまったからたまらな

い。
さすがの爺さんも涙をポロポロこぼしながら「顎（あご）が外れる、顎（あご）が外れる」と言つて這い廻つて苦しがつた。

(三) 尻叩きの刑

昔、久部には殿様の山があつて、領民は立入禁止になつて

いた。
反抗心の強い爺さんは、仲間と一緒にその山に薪取り

に行つた。
運悪く丁度見廻りに来た役人に見つかつて捕まえら

れ、お役所に連れて行かれた。
罪の吟味もそこそこに、一同は竹の鞭で尻を叩かれる

ことになつた。

尻叩きの刑である。

一人ずつ役人の前に出て裸の尻を叩かれるのを見ていた爺さんは、仲間が叩かれる度に「あ痛ようつ」「あ痛ようつ」と大声で悲鳴を上げた。

さて、爺さんの番になると役人は「ウ又は人の叩かれるのを見てあ痛ようとは何事か。横着者めが」と言つて、

人より余分におまけの鞭をくれた。

赤く腫れ上った尻をかかえて帰った爺さんは、町から豆腐を買ってきてもらい、摺り鉢で摺ってそれを尻に塗って三日三晩呻き通した。

(四) ガゴジイ

尻の痛みもなおった爺さんは、懲りることなく又もや仲間と一緒に殿様の山に新取りに行った。

夕暮れ時になると、又々役人が見廻りに来た。急いで仲間と茂みに隠れた爺さんは、役人が近づくのを待って、夕暮れ近くうす暗い藪の中から「ガゴジイ※」をして出て来た。

そのすさまじい形相に、役人が驚くまいことか。宙を飛んで逃げ帰った役人は「久部の山には耳まで口の裂けた鬼が出る」と恐れて、それからしばらくの間は見廻りに行けなかったとのことである。

(※「ガゴジイ」とは、両手の人さし指で左右の下脛を裏返し、両手の薬指で口を両耳の近くまで引き広げ、両手の中指で鼻を押し上げて鼻の穴を上に向かせて自分の顔を鬼の顔のような形にして、目を怒らせ、口から火

を吐くような恐ろしい形相をすること。)

昔の子供達は「ガゴジイ」をして幼児を脅かして面白がったり、友達同志で「ガゴジイ」をし合って遊んだりしたものである。

四、モスケの話

昔、モスケという猟師がいた。

鉄砲を持って、一人で山奥などで野宿しながら獲物を求めて歩くこともあった。

そんな或る月夜に、淋しい山奥の森の中で休んでいると、目の前にミミスズが這い出して来た。

見ていると、やがて蛙が出て来てそのミミスズを呑んだ。

すると今度は蛇が出て来てその蛙を呑んだ。

不思議なこともあるものだと思つてなお見ていると、やがて猪が出て来てその蛇を食ってしまった。

見ていたモスケは、背筋にゾクツと悪寒の走るのを覚えた。

「この猪を獲ったら、今度は俺が何者かに殺されることになる。」と感じたモスケは、恐ろしくなって急いで逃

げ出した。

すると後から「モスケ、いいところに気が付いた」という声がいっまでも追いかけて来た。

五、河童の話

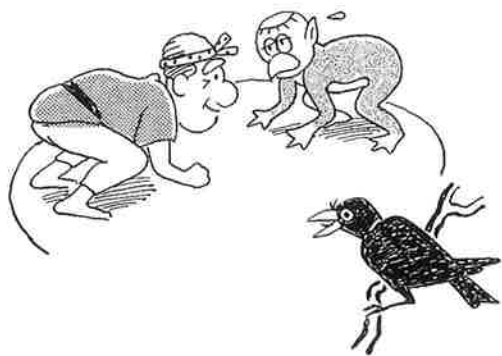
(一) 河童との相撲

N爺さんは、小柄ながら若い頃は働き者で酒呑みでもあった。

晩年には冬になると手拭いで頬被りをして、綿入れを着て杖を突き、いつも日当りのよい近所の家の庭で日向ぼっこをしていた。

子供達が遊びに行くと、ニコニコしながらやや早口で自慢話をして聞かせる陽気なお爺さんだった。

或る日の夕方、N爺さんが町の酒屋で一杯やり、いい御機嫌で川向こうの津留の田の中の道を帰っていると河童が出て来て「爺さん相撲を取ろうや」と言う。「おう、相撲は取るが俺が勝つたらどうするか」と言ったところ、河童は「その時は爺さんをおんぶして川を渡してやる」と約束した。



「よし、そんなら相撲の前に俺とどちらがうまいか逆立ち競べをしよう」と言った。

人の好い河童は、すぐにN爺さんと逆立ち競べをした。北叟ホウソウ笑んだN爺さんは、田の中の藁小積の上で河童と相撲を取り、難無く河童を小積の上から押し落して勝った。

恐れ入った河童は、約束どおりN爺さんをおんぶして水の上を歩いて渡り、こちら岸まで連れて来てくれた。

N爺さんの話によると、河童の頭の天辺には皿があつて、その中に水が入つておれば馬鹿力が強くとてもかなわないが、皿の中の水が無くなると神通力を失い、力が入らずに相撲を取つてもこちらが勝てるそうである。

だからお前達は河童から相撲を挑まれたら、先づその前に逆立ち競べをして頭の皿の水をこぼしてしまつた後で相撲を取るようと、懇々と私達に教えてくれた。

これは作り話にしても、昔の人達が生活の中から汲み取る智慧、物事に対する合理性等が伺われて面白い話である。

(二) 河童と鹿の角

河童は「セコ」とも呼ばれ、魔物であるため普段は人間の目には見えないが、何かに熱中していて人間がいることに気付かない時にはその姿が見えるそうである。

ある農家で、毎晩夜中になると牛小屋の中で牛の悲鳴が聞こえるので、飼主が不審に思つて夜中にそつと牛小屋に行つて見た。

すると河童が一匹牛の背中に馬乗りになつてその血を吸つていた。

血を吸うことに夢中になつていた河童は、人間が来たことに気付かず、その姿をさらけ出していたのである。怒つた飼主はすぐに河童を捕えて縛り上げ、牛小屋の天井の梁に吊るしておいた。

するとその河童は涙を流しながら「私には妻も子もあつて、心配しながら私の帰りを待つています。もう決して悪いことはしませんから縄を解いて下さい」と必死になつて哀願した。

河童の身の上ばなしと、心から悔いるその態度に、身につまされて哀れに思つた飼主は、とうとう河童を放してやつた。

河童は喜び勇んで何度も何度もお礼を言つて帰つて行つた。

次の朝、納屋の梁に付けていた木の鉤かぎに、魚が一杯入つたシヨウケ（竹のかご）が重そうに掛つていた。

そんなことが毎朝続いて、シヨウケを掛ける木の鉤が魚の重みで折れそうになつたので、心配した飼主がこれに代つて丈夫な鹿の角の鉤に取り替えた。

「これならいくら重い魚を掛けても大丈夫だ」と安心して次の朝を待った。

ところがどうしたことか次の朝から魚がバツタリと途絶えてしまった。

河童にとつて、枝別れしたいかつい鹿の角は近寄り難い恐怖の対象であり、恐れた河童はその夜から魚を持つて来ることができなくなつてしまつたのである。

(三) 河童と信心

河童は非常に信心深い動物（伝承上の妖怪）で、満月の夜などには丘の上の小さな広場などに親河童、子河童、夫婦河童などが大勢集まつて、頭目の音頭とりでお月様を真剣に拝んだりするそうである。

また神社のお堂に乞食などが泊つて神前に寝ていたりすると、確かにお堂の真中に寝ていた筈が、翌朝目覚めてみると必ず脇の方に寄せて寝かされてゐるということである。

これは河童達が神様を拜むのに邪魔になるので、お堂の中の脇の方に、皆で抱えて移されたものであるという。

(四) 河童と木挽き（木こり）

昔の木挽きさんは、当面の米、味噌などを持って人里離れた山の中に、柴を組んで小さな小屋を造り、そこに一人か二人位で寝泊りしながら大きな木を切り出していた。

そんな生活をしていた木挽きさんから、幼い頃私達はいろいろな話を聞かされたものである。

その中でも、河童の話は最も興味をそそるもので面白くまた恐^{こわ}かった。

この地方（佐伯）では、河童のことを「セコ」と呼ぶが、河童は冬には山にこもり、夏になると川に下りて来るといわれている。

(1) セコの物音真似

夜、木挽きさんが小屋の中に寝ていると、向こうの谷のあたりで「ギツコン、ギツコン」という鋸で木を挽く音、やがて「バリバリッ、ドシャーッ」という大木が倒れる音がする。

そんな音が一晚中続くのである。

「こんな夜中にどの働き者が仕事をしているのだろう

か」と不審に思つて、朝になつて音のしていたあたりを見て、どこにも木を切つた跡もなければ倒れた木もない。

これはセコが、木挽きさんが木を切る時の音を一晚中真似していたのである。

(2) セコの話聞き

木挽きさんが一日の仕事を終えて小屋の中で夕食を済ませて休んでいると、小屋の脇を大勢のセコが「ヒヨウ、ヒヨウ」という声を立てながら通る。

勿論その姿は人間の目には見えない。

その声はクチバシのある動物の発音だそうである。

木挽きさんも淋しいので「セコさん寄りかな」と声をかけると、セコは喜んで小屋の中に入って来るらしく、やがて木挽きさんも押されて身動きできにくくなる。

そこで人間世界の世間はなしや、特にセコの好む仏教の説話(お説教)じみた話などしてやると、セコは非常に喜んで聞けらしく、木挽きさんも何ともいえないよい気持ちになつてくる。

そして「もう遅くなつたので今夜はこれで帰ってくれ」

と言つと、やがてスーッと周囲が淋しくなるとのことである。

(3) セコの怒り

ある時、心よくない木挽きさんがいた。

いつも夜になると小屋の脇を「ヒヨウ、ヒヨウ」と言つて通り、あまりうるさいので「やかましい!!」と言ひざま、炬の中にあつた燃えさしの薪を小屋の外に投げた。

それがセコに当つてヤケドを負わせてしまつたらしい。

仲間のヤケドに怒つたセコ達が、大勢押しかけて木挽きさんを懲らしめにかかつた。

胸を押さえられて息が苦しく、眠ることも動くこともできない。

たまりかねた木挽きさんが「セコさん、わしが悪かつた。必ずお詫びはするからもう許してくれんか」と言つたところ体も楽になつた。

明くる日の夜、沢山の魚と酒を器に入れて小屋の外に置いたところ、その明くる朝には綺麗に無くなつており、木挽きさんは再び苦しめられることはなくなつた。

セコが許してくれたのである。

◇ ◇ ◇

以上のうち、「二、ヤゴツネの話」の（二）蠟燭の芯を抜く話。また、「三、口の大きい爺さんの話」の（四）ガゴジイの話など、殿様や役人など何のその、封建時代をしたたかに生きる庶民の面目躍如たるものがあるではありませんか。

いつも領民を締めつける支配者を、時にはやつつける痛快な話が村人達の共感を呼んで、次々と語り広めては日頃の溜飲を下げていたのでしょうか。

「四、モスケの話」は何かしら仏教の説話を思わせるものがあり、また西洋のイソップ物語りを聞くような思いもするではありませんか。

◇ ◇ ◇

このようにいろいろな昔ばなしから、何の学問とてなかった昔の庶民の中に、素朴で温かい文化が地方色豊か

に花開いていたことを思う時、「驚ろき」「感動」「想像」など、豊かな心のメリハリを持つて育った昔の子供と、情報と娯楽の洪水の中でシラけて育つ現代の子供と、一体どちらが幸せなのだろうかと考えずにはいられません。

